Vol.21

比較文化学科通信

発行：関東学院大学国際文化学部比較文化学科　〒236-8502 横浜市金沢区釜利谷南3-22-1 TEL.045（786）7179

2015年度　春学期に向けて

巻頭言

多文化共生社会のクリエーターをめざして

比較文化学科長　君塚直隆

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。みなさんは「国際文化学部」の比較文化学科１期生ということになります。そして、２年生以上の在学生のみなさんは、引き続き「文学部」の比較文化学科で勉学に励んでください。

この４月から学部名は変更しますが、比較文化学科の教育理念に変わりはありません。それは「多文化共生社会のクリエーター」を育成するということです。

「多文化共生社会」とは、異なった文化的背景を持つ人々と共に暮らす社会のことです。関東学院があるこの神奈川県にも、古くから中国系や朝鮮・韓国系の方々が住んでこられましたが、近年では東南アジアや南米からも多くの人たちが移住し、県民として生活しておられます。しかし近年の他国籍県民の方々は、日本語が得意でない人が多いのです。

そのような人たちが、街角や区役所、コンビニなどで困っていたとしたら、みなさんはどうされますか？黙って通り過ぎていくのでしょうか？

関東学院では、「人になれ、奉仕せよ」を建学の精神としています。困っている人たちをそのままにしておくことなど、建学の精神に反しているばかりでなく、ひとりの人間としても道義に反していないでしょうか？とはいえ、その困っている人たちの言語や文化も知らずに、手を差し伸べることはできません。

比較文化学科では、自国（日本）を理解すると同時に、異文化をも理解し、それを応用していける実践力を備えた学生を育て、また支援しております。そしてそのような「力」を備えた人間こそが、「多文化共生社会のクリエーター」として、様々な異文化が混じり合うようになった、これからの日本を引っ張っていける人材となるのです。

学生時代はあっという間に過ぎてしまいます。社会人になると「あのときもう少し勉強しておけば良かった」という後悔は必ずついて回ります。そうならないためにも、毎日を大切に、あらゆることに関心を持ちながら、有意義な学生生活を送ってください。

韓国スタディツアー

本学科教員　大内 憲昭

比較文化学科では2015年２月８日～13日、５泊６日の日程で「韓国スタディツアー」を実施しました(旅費・宿泊費は学科負担)。このスタディツアーは、比較文化学科の理念であります「共生と異文化理解」を現地で体験し、学生が韓国の学生と交流し、相互の理解を深めることを目的としたプログラムです。昨年12月から冬休み明けまでの１カ月程、参加者（１年生～３年）を募集しました。応募条件は2,000字の「日韓の現状と課題」を提出し、論文審査と面接により参加者を決定しました。定員８名に応募したのは５名（１年生１名、２年生４名）でした。論文審査と面接を行い、５名全員を合格としました。

このスタディツアーは経済学部の林博史ゼミナールと合同で実施されました。林ゼミナールから７名（男子学生）と社会人４名が参加し、教員をあわせて19名で実施しました。スタディツアーはマイナス気温の寒さのソウルで、関東学院大学との協定校であるハンシン（韓信）大学訪問（寮に宿泊し学生交流)、元「従軍慰安婦」のハルモニ（おばあさん）たちが共同生活している「ナヌムの家」訪問、水曜集会への参加、戦争と女性の人権博物館、景福宮、独立記念館、独島体験館、西大門刑務所歴史館等の見学を行い、朝鮮（韓国）の歴史、日本植民地支配の歴史、領土問題等を学びました。

参加した学生の感想を以下に、紹介します。

「私は今回のツアーで歴史を学ぶだけでなく、韓国の学生と交流し、文化や物の考え方の違いについて学ぶことができました。短い時間でしたが異文化理解の良い機会となり、また別れを惜しむほど仲良くなれたことが一番印象に残りました。」

「この韓国スタディツアーは、私にとってとても有意義なものであり、また自分の知識を増やすことができた貴重なものであった。去年のワールドスタディでも韓国を訪れたが、このツアーはそれ以上に韓国という国を知ることができた。歴史や言語に対する勉強不足を痛感し悔しい思いもしたが、この悔しさをバネとし、日韓の歴史や文化はもちろん、韓国語にも力を入れていきたいと強く感じた。

「私はスタディーツアーに参加して、様々な資料館を周り、様々な場所へ訪れてきたが、一番印象に残っているのはナヌムの家に訪れたことである。日本人の私たちが行って良いのかと不安だったが、想像とは違いハルモニの方たちは必死に私たちに、ただ日本の政府に“謝ってほしい”などの思いを話してくれた。私は「従軍慰安婦問題」について以前から取り扱っていたので、彼女たちの生声で話を聞くと、涙腺が緩んだ。」

「今回のワールドスタディーツアーが私にとって初の海外となったので、様々な心配事がありました。しかしツアーだったおかげでたいした問題も起こらず、安心して韓国の名所や博物館などを見学し、学ぶことができました。とても勉強になったツアーでした。」

韓信大学生との記念写真

韓信大学生と韓国料理店での交流会

「少女の像」（戦争と女性の人権博物館）

「少女の像」（日本大使館の向かい側）

「水曜集会」のハルモニ

世宗大王像の前で、参加した比較文化学科学生

基礎ゼミナール合同合宿

本学科教員　鄧　　捷

「老郷見老郷、両眼涙汪汪」――漢字から意味を想像できますか。中国のことわざです。「(異郷で) 同郷が同郷に会えば、目から涙が溢れてくる」という意味。日本人の若者にとってちょっと不可解な言葉かも知れませんが、中国人ならぐっと心に響くものです。

思えば私は中国の田舎湖北省から北京の大学に入学した頃、本当に心細かったものです。同じ学科に入学してきた学生たちはいわば「五湖四海（広い中国の各地）」から来ています。言葉が違うし（中国の方言の違いはヨーロッパ各国間の言語の違いに相当する）、食べ物や習慣も違います。どう打ち明けて仲間に溶け込んで行けばいいか、心の中で悩みながらも結局一人で抱え込んでしまうことに。そこで救ってくれたのは大学の「同郷会」です。薄暗い学生寮の一室にある「湖北同郷会」を訪ねた時に、自分の中で高まった緊張が解れて、目から涙が溢れた…かどうかは、もう記憶にありません。

「同郷会」は多民族多文化国家の中国ならではの学生組織であり、またやや前近代的な性格も持ち合わせています。近代的都市の東京や横浜の大学では「同郷」という括りで人間関係を展開することはあまりないでしょう。しかし、新しい環境に入って行く時の心細さは万国共通です。大学入学時の期待感とともに心に潜む不安を解し、学生同士や教員との交流を促すプログラムは比較文化学科で用意されています――新入生を歓迎する学科行事「基礎ゼミナール合同合宿」です。

入学後最初の半年間に担当教員のもとに所属して勉強するクラスのことを基礎ゼミナールと言い、それをベースにした合宿は基礎ゼミナール合同合宿です。学生と教員が集まり、ひとつ屋根の下に宿泊し、同じ食卓を囲みます。また、上級生も参加して、大学での勉学や生活について良きアドバイサーとなってくれます。新入生の皆さんはこの合宿できっと新しい友人ができ、新生活のヒントを多く得ることになるのでしょう。以下は昨年度の合同合宿の様子です。

上郷・森の家

教員紹介

讃美歌斉唱

「日本文化探訪」の説明

上級生のアドバイス

食事風景

先生と学生の交流

日本文化探訪

日本文化探訪（沖縄）報告　― 歩く、見る、聞く、記す ―

担当者より ―――――――――――――――――――――――――――――― 本学科教員　大越 公平

2014年度の日本文化探訪（沖縄）は、２年生６名（男子４名・女子２名）が参加し、2014年９月３日（水曜日）から９月９日（火曜日）までの６泊７日の日程で宮古島および沖縄本島を巡りました。幸い、心配していた台風の発生はなく、予定通りの研修を行うことができました。印象に残っているのは、スーパームーンに近い中秋の名月を首里城で愛でたこと、十五夜大綱引きにかける人びとの思いをその場で実感したこと、アグー（沖縄豚）のしゃぶしゃぶをみんなで食べたこと、宮古島の北にある八重干瀬（ヤビジ）での遊泳等々です。また、今回の研修では、宮古島市役所に勤務しているゼミナールの卒業生（平良剛俊さん　2011年３月卒）に会いました。宮古島市内に飲料水を送り出す袖山浄水場を案内してもらい、調査研究および学業全般に関するメンバーへの良いアドバイスももらいました。

私は、研修の目的として３つのテーマを提案しました。（１）首里城の中秋の宴を中心に沖縄の伝統的行事と現代の行事（イベント）を比較研究すること、（２）八月十五夜の行事の見学を中心にして沖縄の行事食に関する聞書きをすること、（３）宮古島の北に位置するサンゴ礁「八重干瀬（ヤビジ）」に行き、柳田國男が『海上の道』で述べた稲作伝播論について考察することおよび珊瑚礁の島における水の確保と利用のための事業を宮古島市袖山浄水場を訪問により知見を高めることでした。このテーマを基本のテーマとして、さらに、６人のメンバーの研究テーマ（荒川真妃「沖縄と豚」、加藤麗美「沖縄と泡盛」、木村圭佑「沖縄フィールドワーク　歴史と伝統文化のつながり」、鈴木悠樹「沖縄の郷土料理」、大宮司竜也「沖縄の建築文化」、福永翔太「沖縄の伝統工芸」）でフィールドワークを行い、レポートをまとめました。「歩く、見る、聞く、記す」の研修は多くの人びとの支援により実現しました。メンバーは人びとへの感謝とチームワークの大切さを学び、昨年度秋学期の勉学を経て、新学期に臨んでいます。

テーマ１＜沖縄の伝統と現代＞　首里城中秋の宴で行われた琉球王朝の「国王」と「王妃」選び、沖縄民謡ライブの店での記念撮影、伊江島を背景にちゅらうみ水族館広場で。

加藤 麗美（２年生：学年は研修当時のもの。以下同様）

私が沖縄を訪れたのは今回が初めてだったため全てが新しく新鮮に見えました。私は泡盛りをテーマとして取り上げ、普段は見学することのない泡盛工場の洞窟を利用した蔵を見学することができました。また、私の幼い頃からの夢でもあった美ら海水族館を訪れることができ、夢が叶った事と水族館の迫力に圧倒され、思わず涙を流してしまいました。首里城や糸満市の大綱引き等、沖縄の伝統文化や行事も見学しました。フィールドワークだからこそ学べること、そして多くの出会いがありました。親切で温かい沖縄の人びとに囲まれながら学ぶことのできた思い出深いフィールドワークとなりました。

福永 翔太（２年生）

日本文化探訪で学んだことは、教科書や資料集に書いてある単純な歴史や文化ではなく、現地の方とふれあいながらの生きた歴史や文化でした。今回の沖縄の旅で関わった全ての人に感謝をし、これからの勉学に繋げていきます。

テーマ２<八月十五夜行事>　糸満での大綱引きおよび牧志公設市場での行事食の食材に関する聞書き。

木村 圭佑（２年生）

日本文化探訪（沖縄）では、沖縄の伝統芸能をじかに見ることができました。特に印象に残ったのは糸満市で行われた大綱引きです。この綱引きは無病息災や五穀豊穣を祈願して行われ、綱引きの前には各地域の代表が様々なパフォーマンスを行いながら町を練り歩きます。綱引きは大迫力で、総重量が10トンもある綱を何百人もの人々が引き合います。沖縄の海は透き通っていてとても綺麗でしたし、心の温かい人に出会え、楽しい旅行でした。

荒川 真妃（２年生）

今回、私の研究テーマ（牧志公設市場での沖縄料理における豚肉および今帰仁<なきじん>村でのアグー豚の飼育）について、現地の人に直接インタビューすることができ、様々な人たちと交流しました。私のテーマ、それにメンバーのテーマを通して見えた沖縄文化の特徴を実感できました。

鈴木 悠樹（２年生）

今回のフィールドワークでは、事前に調べた沖縄料理について興味を持って調査しました。沖縄の食文化には、私の暮らしている関東と比べると、国外の様々な食文化が入り混じり、また、沖縄独自の食文化もありました。沖縄でしか食べられないような料理をいただけたのでよかったと思います。

テーマ３<宮古島の水環境>　八重干瀬散策、クマノミおよび袖山浄水場の軟水化施設見学

大宮司 竜也（２年生）

私は、「沖縄の建築文化」を研究テーマとしてフィールドワークに臨み、「おきなわ郷土村」で古い民家を見学しました。沖縄の古い民家は、間取りなどの構造が決まっており、それは現在の民家にも活かされています。屋敷には、ヒンプンという衝立のような門があり、その右を客が通り、左は住人が通るというルールあるそうです。この民家の研究を通して、沖縄の伝統文化が大切にされていると実感しました。また、宮古島ではたくさんの人と出会いとても心優しく迎えていただき、八重干瀬ではシュノーケリングにより珊瑚礁を散策し、とても充実した７日間でした。

（今後の勉学に向けて）

横浜の文化とは少し異なる沖縄の文化に触れた経験を今後の卒論研究にも活かしてください。

日本文化探訪（沖縄）はメンバーが希望するテーマに合わせた訪問地を選定し、計画に組み入れます。関心のある人は早めに担当者に連絡をしてください。次回もユニークなフィールドワークを企画しましょう。　（大越）

日本語教員養成課程

比較文化学科で日本語教員養成課程を履修し、実習先の日本語学校に就職の決まった卒業生からのコメントです。日本語教員に関心を持つ皆さん、是非参考にして下さい。

スタートライン

鈴木　美穂さん（2015年３月卒業）

2014年６月下旬、私は教育実習へ行きました。そして10月、その実習先の興和日本語学院の校長先生からお話をいただき、在学中から日本語教師として働き始めました。日本語の教え方に悩まされたり、外国人学生からの面白い質問に笑ったりと、あわただしくも楽しい日々をおくっています。

日本語教師になりたいと思ったきっかけは、高校時代に留学生の友人からされた、日本語のささいな違いについての質問に答えられなかったことでした。日本人なのに答えられないことに驚き、日本語に興味を持ち始めます。また、当時国際交流にも興味があり、国際交流ができる仕事につきたいと考えていました。そんななか、日本語を教えながら国際交流ができる「日本語教師」という職業を知り、高校３年から日本語教師を目標に動き始めます。大学は日本語教員養成課程があるこの大学を選び、入学後はその講座でひたすら日本語教師の勉強をしました。また、比較文化学科教授の伊東先生のゼミに入り、文献の講読やゼミでの意見交換などを通して、日本語について考える活動もしました。大学３年までは目標に向かって真っすぐでした。

しかし大学４年、周りが就職活動を始めた頃、迷いがうまれます。日本語教師になれるのか、他に合う仕事があるのか。そこで、私は企業でのインターンシップ、教育実習を経験してみて、どの仕事が自分に合っているのか確かめることにしました。最終的に教育実習を通して日本語教師になることを決めます。実習先では常に楽しみながら実習ができ、「自分に合うのはこの仕事だ！」と確信しました。

そして今、私はやっとスタートラインに立っています。次の目標は「一流の日本語教師」です。教える中で、教える能力も日本語を考える思考力も不十分だと日々感じています。しかし、毎回その日の授業の反省をし、改善案を考えたりと、少しずつ前へと進んでいます。

大学生活や就職活動で迷うことがあるかもしれません。悔いを残さないよう、経験ができそうなことはやってみてください。皆さんが本当にやりたいことができるよう応援しています。

国際文化学部新設記念シンポジューム

－互（レシプロシティー）　恵と国際交流を考える－

本学科教員　矢嶋　道文

日時：2015年１月31日（土）関内メディアセンター
　　13時30分～17時00分
主催：関東学院大学文学部比較文化学科
開催趣旨：2015年度「国際文化学部」スタートを記念してのシンポジュームを開催いたしました。国際文化学部とシンポジュームとの関連は、比較文化学科についてはこれまでに北京第二外国語学院、南京師範大学などとの交流史があり、テーマの「互恵と国際交流」と一致しています。「互恵」レシプロシティー（reciprocity）を熱く語られたのは元学院長（図書館長・文学部長・経済学部長）の富田富士雄先生でした。また、かのＡ．スミスは『国富論』（1776年）の第３篇において「都市と農村とのレシプロカルな関係（互恵）」を熱く論じています。１月31日（土）、関東学院大学関内メディアセンターにはおよそ50名の参加者をお迎えし、７名のパネリストおよび１名の講評者によるシンポジュームを開催いたしました。

シンポジューム内容
13時30分（開会）
挨拶　大橋一人（国際文化学部学部長予定者）
　　「国際文化学部の新設にあたって」
司会・趣旨説明：矢嶋道文（文学部比較文化学科教授）
　　「互恵（レシプロシティ－）と国際交流」について
13時45分（前半）
　　田中　史生（経済学部教授）
　　永井　　晋（神奈川県立博物館）
　　多ケ谷有子（文学部英語英米文学科教授）
　　小林　照夫（本学名誉教授）
　　（休憩）
15時00分（後半）
　　橋本　和孝（文学部現代社会学科教授）
　　見城　悌治（千葉大学准教授）
　　林　　博史（経済学部教授）
　講評　富岡幸一郎（比較文化学科教授）
　　（休憩）
16時15分
　パネルディスカッション
16時55分
　挨拶　新学部を迎えるにあたって
　　伊東　光浩（比較文化学科学科長）
17時00分　閉会
【後援】テレビ神奈川（tvk）、神奈川新聞社
【協賛】クロスカルチャー出版

今回は、テレビ神奈川（tvk）常務取締役三好秀人氏のお取り計らいでテレビ放映（５分番組）を提供して頂き、神奈川新聞社様には当日の予告ならびに記事をお書きいただきました。また、当シンポジュームのきっかけとなった『互恵と国際交流』を刊行したクロスカルチャ―出版様にもご協力いただきました。ここに改めて御礼申し上げる次第です。

卒業生からの就職アドバイス

池澤　友里さん（2015年3月卒業）・・・就職先：㈱横浜グランドインターコンチネンタルホテル

本格的にホテル業界を志すようになったのは大学３年生の秋でした。それまでは人と接する仕事がしたいというだけで特に就職先についてあまり考えていませんでしたが、アルバイト先の元ホテルマンの接客する姿に感銘を受け、私もあんな接客がしたい、接客のプロになりたいと思ったことをきっかけに目指し始めました。就職支援センターの方々には大変お世話になりました。ホテルを志望するなら実際に足を運んでみるといいとよく言われますが、本当にそう思います。内定を頂いたホテルの最終面接に向けては、同じ地域にあるホテルを回り比較をしました。これも就職支援センターの方にアドバイスして頂いたことの一つです。単にロビーを一回りするだけではなく、実際にラウンジを利用しサービスを受けてみることや、会話を聞いて客層を観察することで、そのホテルにしかない特徴、他のホテルとの差別化などたくさんの情報を得ることが出来ます。その他にも部活動でマネージャーとして４年間活動してきたことを誇りに、自信を持って面接に挑みました。挫折しそうになった時、「私は今なぜ就活をしているのか、何を仕事にしたいのか」そう考えた時、私はホテルで働く姿しか想像できませんでした。諦めず続けた矢先に頂いた内定先がこの春から働くホテルです。就活は辛いことも多いですが様々なことを学び、自分が成長できる場です。周りには応援してくれる人が居ることを忘れず、時には周りの助けを借りながら頑張ってください。応援しています。

大勝　龍一君（2015年3月卒業）・・・就職先：㈱毎日企画サービス

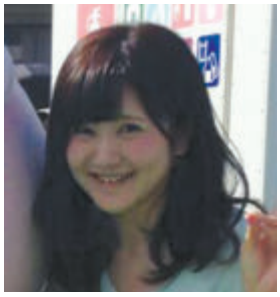
「旅行会社に就職して、最高の旅行プランナーになる！」このように決意したのは、大学３年生の春のことでした。

私は、高校生の頃に歴史や文化に興味を持ち、大学ではこれらのことを学びたいと思い、関東学院大学を選びました。大学の授業を通して自らの知識や見聞を深めていく中で、私自身が日本と世界の歴史や文化を人々に発信したいと感じ、旅行会社を目指すようになりました。夢を実現するために３年生の春から国内旅行業務取扱管理者試験の資格取得を目指し、無事に取得に成功しました。

資格取得後には、エントリーシートや履歴書の作成準備に取りかかりました。それ以外にも、実際に旅行会社で働いている地元の先輩や、旅行会社以外の第一線で働いている方々に話をお聞きし、働く時の軸を定めていきました。就職活動の解禁後は、面接回数をこなして場慣れをしながらも一回一回の面接を大事にして毎回総括をして、次の面接で活かせるようにしてきました。

しかし、いざ就職活動を開始してみると苦難はありました。第一志望の企業に最終面接で落とされたこと。旅行会社の持ち駒が残り１つになったこと。それでも私は諦めずに前向きに前進し続けました。辛さ以上に将来なりたいこと、やりたいことに対する思いが強かったからです。学生時代に経験し、やってきたことに自信と誇りを持っていたことが自分自身のモチベーションになりました。

私がみなさんに伝えたいことは、「どうせ自分は」とか「やったって無駄」とか思わずに、目標に向かって挑戦してみて下さい。壁にぶつかることもあると思いますが、諦めないでください。そしてすべてをやりきった時に自分に必ず自信がつきます。その自信は自分にとっての財産になり、就職活動や入社後に発揮できることでしょう。そして最後に就活は一人ではありません、家族や友人や先生方が支えてくれています。そのことを忘れないで頑張ってください！



西村　奈緒さん（2015年3月卒業）・・・就職先：㈱神奈川銀行

私はチアダンス部 Fits に所属し、部活と並行して就職活動を行ってきました。

初めての就職活動と大会に向けての厳しい練習を同時進行することは、実際苦しい部分もありましたが、大学生活の中で「一つの目標に向かって努力し、頑張る」という経験をすることは、就職活動を行うにあたって、とても大切な事だと感じました。

就職活動をスタートさせる前から、お客さんとの距離が近い仕事がしたいと感じていたため、接客業を中心にエントリーしていましたが、面接での印象が重要となる接客業で、面接に不安を抱えていた私は、スクールに通い、面接やディスカッションの練習を繰り返し行いました。何度も反復し、またイメージトレーニングを行うことで、いつの間にか面接が得意になり、楽しむことができるようになりました。

私は就活を通して、自分と向き合うこと、自分を信じることを学び、親や友人、学校の職員の方など周りの人の大切さを改めて実感することができました。特に部活は、私にとってとても大きな存在で、部活と並行して就活を行ったことが良い息抜きになっていたのだと思います。また、部活で頑張ることで自分に自信が持て、胸を張って面接でアピールすることができました。これから就職活動を始める方、まだまだ先の方、大学生活の中で、部活、サークル、アルバイト、趣味、何でも良いので、目標を持って取り組めることを見つけ、楽しんで大学生活を送って下さい。きっと、その目標へ向かう姿勢が、就職活動で戦う武器になると私は思います。

新任教員挨拶

本学科教員　菅野 恵美

皆様はじめまして。菅野恵美（かんのえみ）と申します。専門は中国古代史、特に秦漢時代を研究しております。挨拶に代えまして、中国での体験と現在の興味について書かせていただきます。

なぜか幼少期より中国の文化に魅せられ、大学では当然のように中国語を履修し、東洋史の門を叩きました。古代・近世史では中国の多様性と力強さに魅了され、近代史では、中国の痛みを知り、日本の戦争責任の重さに衝撃を覚えました。それでもなお中国への憧れが高じ、学部時代に国費留学の機会を得て二年間中国に滞在しました。

滞在地は四川省の成都です。成都は長江支流の岷江（びんこう）の畔に位置する古都で、川の緩やかな流れと共に人々が時間をゆったりと享受するような、麗しい都市でした。四川省の茶館文化は有名で、河岸の寺院や公園には必ず茶館があり、人々が竹製の椅子と机で、半日茶を飲みながら過ごすという風景が到る所で見られました。実はこの訪中が人生初めての海外渡航であり、私はそのまま日本に帰ることなく二年間を中国で過ごしました。それほど、滞在拠点となった成都は美麗かつ居心地のいい都市だったのです。

また、日常生活や旅先で出会う中国人も魅力的でした。人々は臆することなく初対面の人間に話しかけ、意見や情報を交換し合います。出会いから旅が新たな展開を見せ、あるいは生活が奥深くなっていく、そういう経験を何度もしました。交流によってアイディアや情報そして物語が生まれるという体験は、人見知りであった私には非常な驚きでした。

私は中国古代史が専門ですが、研究者となり現地調査を重ねる中で、今では現代中国の問題にも注視しています。それは環境問題と貧困問題です。これらの問題は表裏一体にあり、政治・経済の状況とも複雑に絡み合い、また歴史とも関係しています。中国人はこれをただ傍観しているのではありません。現在様々なNGOを中心とする活動が活発となり、市民が企業や政治に働きかけるという新たな状況が生まれつつあります。まさに人々の問題意識と必要性から、交流・情報交換、そして新たな仕組み構築の模索が始まっています。これは中国の歴史の中で繰り返されてきたことでもあります。

中国は一つのきっかけに過ぎません。ゼミの学生たちには、中国の歴史と社会を学ぶことで、その知見を応用し、郷里や他の文化へと興味の対象を広げていってほしいと思います。そして私も共に学んで生きたいと思います。

第３回　金沢・鎌倉フォーラム

本学科教員　佐藤 茂樹

学期末の試験もほぼ終わった１月31日土曜日、13時から16時30分にかけて「金沢・鎌倉フォーラム」が開催されました。これで三回目になります。このフォーラムは、主に近隣にお住まいの方々に金沢・鎌倉の地に根ざした文化伝統を仲介することを目的として始まったものです。今回は「地域と伝統を結ぶ」をテーマに、鎌倉彫資料館の協力を得て、講演会と鎌倉彫の体験教室の二部構成で実施しました。伝統を知識や観念として学ぶだけではなく、身を持って体験していただく試みです。彫刻刀を扱うので、参加者の数を25名に限らせてもらいましたが、講演会「彫と漆」には予定を上回る方々の出席を得て、盛会のうちに日程を終えることができました。

この日の講演によると、鎌倉彫の特徴は「用と美」の一致にあるということです。つまり、「装飾が使い勝手を犠牲にしない」と同時に「使い勝手の追求が美を損なわない」という考えが形となったものが鎌倉彫の工芸品だということです。新興の武家社会の精神を反映した美学です。わたしはそれを聞きながら、「機能」と「装飾」をキーワードにした世紀転換期のヨーロッパ建築や工芸をめぐる議論を思い浮かべました。もちろん安易に同列に論じられることではありませんが、一見無縁な事象にも対話の土俵は見出せるものだとうれしく思ったものです。こんなところにも、時代と地域を縦横に飛び越えた比較文化の視点が得られるのかも知れません。

体験教室の内容は、あらかじめ絵柄が描かれた素材に絵柄に沿って模様を掘り進めて行くというものです。完成させるのは勾配盆という直径10センチほどのお皿のような器で、絵柄は花や動物の４種です。鎌倉彫資料館で指導に当たられている方々にその都度助けて戴いても、予定の時間内で彫り終えるのは至難の業でした。本来はこれに「塗り」が加わるのですが、それは希望者が後日館に赴いてということになりました。

このフォーラムは、比較文化学科と近隣にお住まいの方々の交流の場です。今のところ学生の皆さんの関わりは講演の録音や写真の撮影など補助的なものにとどまっていますが、近い将来には学生の皆さんが主体となって企画し、世代を超えて地域と交わっていく場に発展していくことを願っています。

比較文化学科通信 Vol.21　2015年4月1日発行
編　集：関東学院大学国際文化学部比較文化学科
編集協力：関東学院大学国際文化学部比較文化学科ゼミナール連合会
〒236-8502 横浜市金沢区釜利谷3-22-1　TEL:045(786)7179　URL:http://www.univ.kanto-gakuin.ac.jp
印刷所：株式会社なまためプリント　〒231-0006 横浜市中区南仲通4-43馬車道大津ビル　TEL:045(641)8080